

2012年4月  
民 俗 — No. 4

# けんぱくものシリシート せん ば こ 千 齒 扱 き



こちら側に立  
つよ。

稻穂をはさん  
で、脱穀します。

は  
歯がたくさん  
なら  
並んでいるよ。

てつせいひんつく  
鐵製品を作る  
や  
“かじ屋さん”が  
は  
歯を、ほかのとこ  
ろは “大工さん”  
が作ります。



「千齒扱き」は、稻穂からもみを脱穀（穂からとる）する道具です。“たくさんの歯がついている”または、“一度に千把（千束）も扱くことができる”ことから「千齒扱き」といわれています。江戸時代の元禄年間（1688～1704年）に発明され、明治時代（1868～1912年）までさかんに使われていました。大阪で大工さんが作った物を見た佐平という人が、作り方の技術を鳥取県倉吉にも持ち帰り広めたといわれています。

## つか かた 使い方

いなほ は あいだ 稲穂を歯の間にはさんで手前に強く引くと、

もみが落ちるしくみになっています。昔は、竹

せい ほん はし 製の2本の箸のカラハシ(唐箸)を使っていまし

たが、1度に脱穀できる量は少ないのでとても大変な作業でした。千歯扱

きは、1度の脱穀でカラハシの約3~10倍の量を脱穀できました。

とても便利な「千歯扱き」の登場は、それまで脱穀作業で収入を得て  
いた後家(旦那さんを亡くした女性)さんたちの働く場所を奪ってしまいました  
たため、別名「後家倒し」と呼ばれています。



カラハシ(唐箸)

### だっこくどうぐ 脱穀道具のうつりかわり

やよいじだい 弥生時代は、※石包丁で実った穂をつむ「穂つみ」を  
していました。やがて、稻の根本から刈り取る「根刈り」  
が行われるようになると、脱穀の道具が必要になりました。  
たいしょじだい 大正時代(1912~1926年)に足踏脱穀機が広ま  
ると、千歯扱きは徐々に使われなくなりますが、種もみ  
を取る時にだけ使う農家もありました。また、昭和50年  
代(1975~1985年)になると、1台で3役(刈り取り・脱  
穀・袋詰め)をこなすとっても便利なコンバインが登  
場します。



あしぶみだっこくき  
足踏脱穀機

いしほうちょう ※石包丁…くわしくは、【けんぱくものしりシート考古No.2】をみてね。

参考にした本 『写真で見る 日本生活図引 1 たがやす』 弘文堂 1989年

『日本の年中行事百科 民具で見る日本人のくらし Q&A 5』 河出書房新社 1997年 ほか

らいげつ がつ  
来月(5月)の

けんぱくものしりシートは  
げんせい せいびつ 現勢・生物-4だよ!

おたのしみに!



モッちゃん



岩手県立博物館

〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34  
Tel. 019-661-2831 Fax. 019-665-1214  
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>